
Si je tombe dans l'amour avec vous

篠宮 かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i j e t o m b e d a n s l ' a m o u r a v e c
v o u s

【Nコード】

N 9 8 9 5 X

【作者名】

篠宮 かおる

【あらすじ】

他サイトに別名で掲載していた作品を、題名をフランス語にして、加筆修正をした物です。

夫は社長、妻は一般社員。

二人の関係は崩壊寸前。

「お願い、私を愛してるなら別れて・・・。」

不器用な夫婦のラブストーリー。

♪、 0 動き出した歯車。(前書き)

お引越し作業中です。

♪、0 動き出した齒車。

<愛してる>

そんな言葉は、私達夫婦の間には、最初から存在していない。

左薬指でさりげなく輝く指輪は、物言わぬ冷たい鎖。

その鎖に刻みこまれている言葉は、想いの籠っていない愛の言葉。

- - L' amour qui est destin? - -

真実味のない、当てつけの様な言葉。

日本語に訳せば>運命の恋<。

フランス語にしてあるのは、私に対する嫌味。

私、菜々宮^{ななみや}吉乃^{よしの}、26歳は、結婚して三年目の、どこにでもい
そうな普通の一般社員。

それに引き換え私の戸籍上の夫は、今、最も世間で話題の中心に
なっている若手実力派の社長。

見た目も然ることながら、言動から視線まで、全てが最高品質で、
文句のつけようのない所がまた逆に腹立たしい所。

鋭い眼は、常に私以外を見つめていて、微かに掠れ、良く響く甘
い声は、ベットの中で聞けば、程よい甘さを含む媚薬にも匹敵し、
魅了される。

そして、ガツシリしている割には、決して太っていない鍛え上げ
られた身体。

それで35歳となれば、玉の輿を狙っている女性社員にとっては、最高の獲物である事は間違いない。

きやあきやあと、やけに煩く、甲高い媚びた奇声をあげる先輩達を尻目に、私は与えられた仕事を全うしようと、美女の集団に囲まれている夫を見て見ぬふりをし、その横を堂々と通り過ぎた。

家では夫婦でも、一步でも家から出れば、その瞬間から私達は他人になる。

（まあ、家でも他人だけどね・・・？）

そんな事を思いながら、歩いていると、声を掛けられた。

「あら、菜々宮さん。アナタいつからそこにいたの？」
全然気付かなかったわ。

と、勝ち誇った笑みを浮かべ、小馬鹿にされ、蔑まれるけど、もうそんな程度の幼稚な虐めでは何とも思わないし、感じない。
逆に、そんな事しか出来ない人を憐れみたくもなる。

（どこがいいのよ、あの人の。）

でも、言い返し、反論するのも面倒だし、億劫。
なら。

「すみません・・・。」

小さく、怯えた声で謝り、頭を下げ、下に俯いて走り抜ける。
それが愉快だったのか、女性の甲高い声が聞こえた。

「アレでも同じ女かしら。見た？あの子、今日は化粧すらしてなかったわ。」

大袈裟に声をあげ、私をバカにし、優越感に浸っていた女性は、自分の隣に立っていた男性に甘えるように凭れ掛った。

その男性は、私が勤務している会社の現社長であり、戸籍上の私の夫である、綾橋^{あやはし} 智^{さとし}さん、35歳。

でも、胸は痛まない。

そんな光景に胸を痛めていた可愛い私は、結婚して2ヶ月目にして死んでしまった。

今では涙も出なければ、溜息さえ漏れない。

「吉乃、大丈夫か？顔色悪いぞ？」

出勤して早々、疲れ果てて頭を抱えていた私を気遣い、声をか掛けてくれたのは、同期で入社した営業部のエース・長瀬^{ながせ} 類^{るい}、28歳。

同期の誼で、私が営業部から総務部に異動した今でも、こうして仲良くしてくれている。

（いけない、今は会社なのに・・・。）

気付かれないように、そっと自然に笑顔を浮かべる。

「類は今日も、相変わらず朝から元気ね・・・？」

「まあ、営業は体が資本だからな。それより、本当に大丈夫か？お前また痩せたんじゃないのか？」

節だった指が、私の頬を滑っていく感覚が懐かしくて、不覚にも泣きそうになってしまった。

お互いが大切過ぎて、親友以上になれなかった私達。

後悔していないと言えば嘘になるけど、今の私は、昔の弱い私じゃない。

彼にも、彼の人生がある。

大きな手の平に手を絡めるように手を重ね、私はもう一度笑顔を浮かべた。

「大丈夫よ？私には愛する旦那様がいるから。類は知ってるでしょ？」

嘘。

愛なんかない。

だけど、類は優しいから、だから嘘を吐く。

あの人に対して抱いている感情があるとするのならば、それは深い深い諦めの様なもの。

愛しさもなければ、悲しさや憎さも感じない。

『無関心』と言う言葉が近いだろうか。

密やかな逢瀬を終えた私は、パソコンに向かい、ひたすらキーボードを叩くように弾く。

緩くウェーブが掛かっている柔らかめの長い髪が、他人の視線か

ら私の表情を覆う様に隠す。

さっき、類に「痩せたんじゃないか？」と、指摘された時は驚いて、一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう位、驚いた。

確かに最近、私は最近痩せた。

でも、バレるとは思ってもなかった。

（あの人は気付かないのにね・・・。）

近しい人より、昔の想い人が私の変調に敏感なんて。

私が痩せる理由は拒食症気味による少食で、その拒食症気味の原因は、環境の変化によるストレスと、心因性のものだと病院で判断された。

私を担当してくれた先生は、そのストレスの原因を取り除かなければ、後々、私が悲しむ事になると、はっきり断言した。

そして最後に、精神科の先生も紹介してくれて、くれぐれも興奮しないようにと、注意した。

ふと、顔を上げ、何気なく辺りを見回した私は、見たくもない光景を目にしてしまい、無意識の内に唇から血が出るほど、強く噛み締めていた。

（ああ、やっぱり。結婚なんてしなければよかった。）

私が偶然にも見てしまったモノは、戸籍上の夫が、綺麗で、魅力的な女性とキスしている所だった。

結婚して、今年の10月で三年。

それは結婚した時から、僅かに軋み、隙間だらけだった私達夫婦の擦れ違う歪んだ関係が、いよいよ変化する刻^{とき}を悟り、今にも大きく動きだそうとする瞬間でもあった。

♪、1 亀裂と発症（前書き）

この話から色々手直しが入ります。

♪、1 亀裂と発症

涙は三年前に枯れ果てたのだと、ずっと思いこんできた。けれどそれは私の単なる思い込みだったらしい。

両頬に静かに伝わる、熱くも冷たい心の雫は、止まる事を忘れたかのようにずっと流れ続けれている。

（何を泣く必要があるの・・・。）

寝室は結婚して三ヶ月目に別々となり、夫婦として身体を重ね合わせた記憶も一度としてない。

なのに私は今、それを悔しく、惨めに感じている。

昨日、あの後、私は正午までに仕事を何とか予定通りにこなし、早退し、病院を受診した。

その病院は、昨年の秋から定期的に受診している所で、受診したのは精神内科。

私が診察室に入った瞬間、私を担当してくれている先生は、厳しい声で「やめなさい」と言葉を発した。

私には、先生がどうしてそんな事を言うのか判らなかった。

先生はそんな私の心理状況もお見通しだったのか、静に囁くように言葉を発した。

最近、泣いた記憶は？と。

私は首を横に振り、覚えてないと答えを返した。

先生は痛ましげな表情を浮かべながらも、最近あった事を事細か

く聞いてきた。

これも治療の一環だからと、辛くても話してくれるね、と、言われれば、私は望まれるがままに話した。

そして、ついさつき職場で見たことも、ありのまま淡々と話せば、先生は大きな溜息を吐いて、それが原因か、と、本当に小さく呟いて、私に聞いてきた。

「旦那さんとは別れられない？」

別れられなければ、近い内に確実に倒れると言われた私は、それでも別れられないと、無意識に答えていた。

一夜明け、目覚めた今、その理由が解った気がした。

いくら口先で愛がないと言っていたとしても、私はいつか。

（ああ、私って何処まで救いようがないの・・・。）

そう。

心の中ではいつも、いつか、きっと、と、思い、願っていたのかも知れない。

でも、それももうそろそろ限界。
心が、身体が、そして何より私自身が、声無き悲鳴を上げ、今にも狂ってしまいそうだった。

ベッドから降り、姿鏡の前に立つ。

鏡の中には、女性らしさの一欠片もない、貧相な身体つきの私がいた。

「吉乃、貴女、どうしたいの・・・？」

鏡の中の私は弱々しく、誰だって抱きたくない、鶏ガラより粗末な女にしか見えなかった。

鏡の中にいる私自身に声をかけても、答えが返ってくる訳でもないのに、それでも私は答えが欲しい為、自問自答を繰り返す。

（とりあえず、食事作らなきゃね・・・。）

そう思いながら、着替える。

その着替えている時でさえ、私の頭の中は、暗い思いと考えが常に支配している。

今の生活を捨てるのは簡単。

でも、その後の私の生活は？

不況な世の中のこのご時世、再就職なんて簡単に出来ない。

離婚だって、離婚後の住居や仕事、住み易い環境を整えてからの方が良いに決まっている。

大きめなトレーナーをクローゼットから出し、ジーンズと合わせれば、身体の線は簡単に隠せる。

長い髪は適当にアップし、バレッタで留める。

そのバレッタは、結婚が決まったお祝に、と、類が、特別にオーダーメイドしてまで、注文買い取りし、贈ってくれたモノで、一番気に入ってるモノ。

最後に、指輪をつけようと、ジュエリーボックスに手を伸ばし掛け、やめる。

（心もないのに、わざわざ自分から鎖をつけてどうするの・・・
ー。）

自分の愚かさや滑稽さに吐き気がする。

そんな気分をなんとか押し殺し、ガチャリと、寝室からリビングへと通じる扉を開くと、そこにはもう笑うしかない光景が、今や遅しと、私を待ち受けていた。

「お邪魔したみたいですね。どうぞ、私の事はお気になさらないで下さい。」

如何にもこれからという場面に出くわしてしまった私は、喚く事より、微笑を浮かべ、黙認する事を選んだ。

指輪をしていないだけで、私はひどく精神的に楽だった。

（最初から、こうしていれば良かったんだわ。）

現に、名前だけの偽りの夫に睨まれている今も、全然怖くもなければ、悲しくて辛くもない。

自分でも気付かない内に、自然と笑みが浮かんでくる。

「吉乃・・・？」

その笑顔の意味が解らなかったのか、名前だけの夫・智が、苛立った表情から困惑した表情で、私を見つめ、自分の身体にしな垂れ掛っていた妖艶な美女を引き剥がし、私と正面から向き合った。

そして、ゆつくりと伸ばされてきた手を、私は大きな音を立て、打ち払っていた。

「私に触らないで!!」

叫んだ瞬間、目眩が私を襲った。

(・・・っ、こんな時に・・・。)

だけど私はその襲ってきた突然の目眩を、気力と興奮から無視し、近くにあったガラスのフォトフレームを掴み、智に投げつけた。

投げつけたフォトフレームには、私と智のウェディング姿の写真が収まっていた。

粉々に砕け散ったフォトフレームは、私達夫婦の関係の様だった。

最初から解っていた。

私達夫婦の間に、『愛』などと言う、愚かで、甘い感情がないことなど。

(なのに、なのに・・・っ。)

結婚して二ヶ月位までは、確かに恋はしていた。

ただし、それは恋に恋にしていただけ。

荒れ狂う心を抑える為、私は自分自身に暗示をかける。

私が恋していたのは、幻で、類だけ。

この人になんて、恋なんかしてない。

(そうよ、恋なんてしてない。)

「ああ、何よ。その目は。貴方はいつもそう。私をいつもそうやってバカにして！！気に食わなかったのよ・・・っ。」

貴方の顔が、と、続く筈だった私の言葉は、無理して抑えつけていた強烈な発作により、声にならなかった。

胸を掻き毟るほどに、辛く、息苦しい発作は、私の身体からの命がけのSOS。

両膝をリビングの床につけ、右手で身体を支え、左手で胸元を押さえる。

（ああ、だからだったのね。）

決して興奮してはならないと言われ続けた意味が、今、初めて解った気がする。

死にたくないのに、死神の甘美な囁きが私を誘い、私はその囁きに誘われるがまま、意識を手放した。

♪、 1 亀裂と発症（後書き）

一端、区切ります。

♪、2 キス（前書き）

短いですが、更新。

♪、2 キス

まだ、ダメよ……。

まだこちらに来てはダメよ……。

私の愛しい……。

生と死の空間で彷徨っていた私を現実に連れ戻してくれたのは、どこかやさしく、慈愛に満ちた知らない声と、頬に感じた痛みだった。

その頬の痛みを目を開くと、そこには何故かアノ人達がいた。

(ど、どうして、いるのよ!!)

いたのは、菜々宮の母と姉。

「吉乃……？ 吉乃！！良かった。あなた、智さん、吉乃が目醒了ましましたわ。」

恐怖で凍りついた私の身体を、母は涙で潤んだ瞳を細め、嬉しげに微笑んで見せ、私の身体を起こし、ベットも起こし、甲斐甲斐しく世話を焼いた。

傍から見れば、美しい家族愛に見えるこの光景。

私はその光景を守る為に、固まった表情筋を動かし、微笑んで見せた。

「お母さん、私、少し寝過ぎちゃった？」

掠れた小さな声は、母と姉の気に召さなかった様だった。

「吉乃、アンタ憶えてないの？アンタはね、過労で倒れたのよ。智さんが病院に連れてきてくれなかったら、危なかったのよ！？」

姉は私の胸元を、ぐっ、と、力を込め驚掴み、揺さぶった。

「い、痛いよ、翠ねえ。分かったから放してよ。」

いつもこうだ。

諦めながら、抵抗しつつもそのまま揺さぶられていた私は、逸らした視線の先で、初めて戸籍上の夫と目があつた。

智は何故か酷く憔悴していて、私が自分を見ている事に気付くと、顔を歪め、手を伸ばしてきた。

後から思いだせば、私はこの時初めて、智の顔を見たと思う。

不安そうに歪められた顔は、確かに私を案じていてくれた。

静に、ねつとりと絡み合う視線。

結婚して、恐らく初めて絡み合った視線。

そしてそれは、私に戸惑いと熱を生じさせた。

「あれ？吉乃、アンタ熱でもあるの？顔が真っ赤よ？」

「ふえっ！？」

（そ、そんな・・・。）

私は姉の言葉を否定しながら、まるで智の視線から逃げるかのように布団を被った。

だけど、病院の布団は薄くて頼りない。

私はいとも容易く姉に布団を捲られ、姉を恨んだ。

返して、と、繋がる筈だった言葉は、あっさりと固まってしまった。

（どうして、キスされてるの！？）

すっかり混乱してしまっていた私は、抵抗す事さえ忘れ、智から与えられた、熱く、性急なキスに溺れ、気がついた時には胸元が肌蹴られ、ベットの上で羞恥に悶えていた。

キスに溺れながらも、それとなく家族の姿を探したけど、家族の姿は既になく、病室には私の乱れた吐息だけが甘く響く。

「ん・・・、やつ・・・。」

思考がついていかない。

首筋に感じた痛みと、ちゅっと、濡れた音で、更に何も考えられなくなった。

「吉乃、吉乃・・・っ。」

フロントホックのブラジャーに、大きな手が掛かった時、甘く、
乱れた空気を邪魔するかのよう、病院に一人の女性が現れた。

「智さん、迎えに来ちゃった。」

艶やかで、自信に満ちた、私とは正反対の魅力的な女性の登場で、
私は瞬時に正気に立ち返っていた。

乱された病衣を手早く直し、ベットから降りる。

淫らなこの身体が、堪らなく嫌だった。

「ちょっとトイレに行ってきます。」

「吉乃、戻ってこいよ?」

「・・・・・・・・・・。」

（アナタは何処まで私を苦しめるの・・・?）

私が返事をしない事に、何かを察知したのか、智は私と目を合せ、
念を押すように「行ってこい」と言いながら、肩を軽く叩いた。

病室から出た私は、当てもなくなく院内を歩いた。

（どうして抵抗しなかったの?）

答えなら解っていた。

だけど、考えずにはいられなかった。

歩きながら考えているのは、つい先程までの事。

キスされた瞬間は驚きで、段々と深くなっていくキスは、女としての本能が働いてしまったのか、浅ましくも止められなかった。

抵抗できなかったのは嬉しかったから。

（なんだ、嬉しかったの？私は。あんなに嫌だったのに・・・、あんなに・・・。）

報われない恋はしないと、あの時に誓っていたというのに。

自分で自分が情けなくなってくる。

ぼろぼろと勝手に溢れてくる涙で、前が見えなくなってきた私に、神様は私に更なる試練を科そうとしていた。

だからだろうか。

私が気付かない内に智につけられ、首筋に咲いた紅い花は、励ますかのように中々消えなかった。

♪、3 宣告

泣くだけ泣いて、そのせいで腫れてしまった瞼。

こうして泣いている間にも、運命の時は静に迫っていた。

泣いている間、無意識の内に歩き回っていたせいか、私に宛がわれた病室までは、随分と距離があった。

ふらふらと病室まで歩いていた私は、寒気を覚えて立ち止まった。その時。

「菜々宮さん、丁度良かった。少し良いですか？」

「どうしたんですか？加賀見先生。」

私を呼び止めたのは、私の担当医の加賀見先生だった。その加賀見先生に、いつになく真剣な瞳で見つめられ、嫌な予感がした。

「ここじゃ、ちょっと・・・。」

案の定、加賀見先生は私の顔を見て、気まづげに顔を歪め、逸らした。

（いや、いやよ・・・。）

ついていけば、嫌な事を告げられる。

頭では分かっているのに、足が勝手に動く。

加賀見先生はまだ若いながらも、名医として有名で、彼の手に掛かれば、どんな患者も明るくなると。

だけどそんな加賀見先生でも、時には残酷な宣言をしなければならぬ時だってある。

それがたまたま。

そう、偶然だっただけ。

その残酷な宣告を受ける患者が、私だったと言っただけ。

加賀見先生に連れて来られた所は、小さな誰もいない部屋だった。

備え付けのソファ―に座る様に促され座った私に、加賀見先生は憐みの籠った瞳と口調で話し始めた。

「悪かったね。でも、菜々宮さんは家族には知られたくなかっただろうから。」

これから話す事は、全部菜々宮さんの為だからね？

微笑んでいたつもりだったのかも知れない。

だけど、先生は涙を流していた。

「菜々宮さんは、俺が今まで診てきた患者さんの中で、一番強くてか弱い女性だね。それは精神面だけじゃなくて、身体の方もそうだ

った。」

先生が淹れてくれたホットココアの湯気が、私を慰めるかのように優しく揺れる。

「菜々宮さん、正直に言うと、このままでは君には妊娠は無理だ。妊娠しても子供は胎内で充分に育たないし、それ以前に妊娠する確率は、今は限りなく0%に近い。」

「・・・・・・・・。」

（う・・・そ・・・、よ・・・。そんなのウソ。）

「例え不妊治療をしたとしても、君の身体はもたない。」

口では待って、と、言っている筈だった。

だけど、実際はガタガタと震えているだけだった。

（聴きたくない、聴きたくない！！）

恐怖で震えているのに、それでも加賀見先生は、神様は、情け容赦がなかった。

「菜々宮さん、君はスキルス胃癌の可能性があるそうだ。もしそうなれば、余命はもって一年、早くて半年だ。」

スキルス胃癌・・・。

それはとてつもなく進行の早い、救いようのない死に直結する様

な病。

嘘だと、夢だと叫びたかったし、言つて欲しかった。

だけど両目から溢れ出す熱い涙が、現実だと私に知らしめる。

「治療は出来る限り手を尽くすけど、この手の病を克服する事はまず難しい。一度、精密検査をしてみないと・・・。」

加賀見先生の声は聞こえなかった。

「・・・っ、先生っ、時間を・・・っ、考える時間を、私に下さい・・・。」

やつとの事で絞り出した声は、絶望の色に染まっていた。
それほどまで、私は追い込まれていた。

（我ながら、なんて醜いのかしら・・・。）

死にたくないと思うのはどうしてだろう。

その時、私の頭に浮かんだのは、あの人の顔だった。

（どうして・・・。）

それを否定したくて、認めたくなくて、そして泣きたくなくて、私はその人の顔を頭から追い払う様に、頭を左右に振り、ソファから立ちあがった。

「先生、この事は、絶対に何がなんでも、誰にも言わないでお願い下さい。」

「菜々宮さん、もしかして、君は、旦那さんと……。」

この人はなんて聡いのだろう。

「ええ。別れるつもりですから……。綾橋には他言無用をお願いします。」

つくづく、私は幸せに縁がないらしい。

加賀見先生は私の暗い笑みを見て、本当に無念そうに、ギョツと目を閉じた。

私が時間が欲しいと言ったのは、未練を断ち切る為であり、心の整理をする為。

「先生？私はね、菜々宮の人間でもないんですよ……。？アノ人達は、私が気付いてないと思ってるんです。」

バカみたいでしょ？

スツと、立ち上がった私が、家族の話をした理由を悟ると、先生は更に悲壮な表情を浮かべ、「解った」とただ一言だけ呟き、そのまま黙り込んだ。

少しだけ出歩いただけだった筈が、思わぬ話のせいで、私は夕方になるまで小部屋でばんやりしていた。

余命を宣告され、家族の話をした後、直ぐに立ち去るつもりだったから、私はずつと立ち尽くしたままだったけど、加賀見先生は、回診に行ったのか、既にいなくなっていた。

どのくらいの間そうしていただろう。

コンコン、と、響くノックの音に、私は小部屋の時計を見て驚いた。

時刻は18時を過ぎ、夕食の時間だった。

「菜々宮さん、夕飯の時間ですよ?。」

ノックの主は、綺麗で健康そうな看護師だった。

「すみません、今すぐ戻ります。」

「そうなさって下さい。ご家族の方が心配なさってますよ?」

（家族・・・?）

家族って誰の事?

ああ、そうか。

看護師の言葉に、フフと、暗い笑みを漏らした私は、心配して捜しに来てくれた看護師を促し、一緒に部屋へと戻り、偽りの笑顔

を浮かべた。

病室にいたのは、想像していた通りの人達だった。

血の一滴の繋がっていない姉に、偽りの両親。そして、姉の優しい旦那様。

（そう言えばこの人は、区役所に勤めていたような・・・。）

「なに？吉乃ちゃん。僕の顔に何かついてる？それとも好きになっちゃった？」

私が顔を黙って見ていた事に何を思ったのか、姉の旦那はふざけた様な事を言った。

いつもならその程度の冗談は、笑いながら流していたけど、今日はダメだった。

今日は疎ましく、そして腹立たしい。

「寝言は寝てからにして下さい。貴方は菜々宮家の婿なんですよ。それを自覚してらっしゃるんですか？」

一度決壊した思いは止まらない。

自分でもらしくないと思いつつ、辛辣な言葉を止める事は出来なかった。

「帰って。二度と姿を見せないで。あなた達の顔を見るだけで、お

かしくなるのよ！！今日限りで縁を切って！！」

奇しくも、それは初めてあの人達に対する反抗だった。

看護師を証人にして、夕飯のお盆を激情のままひっくり返し、酷い人格を見せつけた私は、布団を被って丸くなった。

暗闇は私を守ってくれる。

家族から伝わってくるのは、憤りと苛立ち、そして、表向きの感情である戸惑いだけ。

看護師は加賀見先生から私の事情を聴いていたのだろう。

ひっくり返された食事を片付けながら、事務的な口調でアノ人達に帰る様に促した。

「お引き取り下さい。これ以上興奮させられるとこちらが困りますので。」

「私達は家族なんですよ！？」

・・・ドクリッ・・・。

心臓が嫌な言葉を聴き、悲鳴を上げる。

（助けて・・・、助けて・・・。）

「お引き取り下さい！！警備員を呼びますよ。」

恐怖で怯えていたその時、力強い牽制の声が響いた。

その力強い声は、私を必死に守ろうとしているのか、決して揺るがなかった。

幸い、私の病室は個室だった為、他の人達に迷惑をかける事はなかった。

看護師とアノ人達の互いに譲らぬ問答は、私の担当医の加賀見先生の登場によつて、あっけなく終わりを迎えた。

加賀見先生は、布団を被っている私の頭を優しく撫で、静に微笑む気配がした。

「お嬢さんは明日には退院なさいます。そうですね、吉乃さん。」

その言葉には幾つもの含みがあった事は、その時は、私と加賀見先生、そして、その場にいた看護師にしか解らなかった。

♪、4 距離（前書き）

暗いです。ひたすら暗いです。

♪、4 距離

（神様、アナタは意地悪ですね……。）

退院した私を待っていたのは、以前の生活となら変わり映えない毎日と環境で、相変わらず私は一般社員で、あの人は社長で、たとえ会社ですれ違ったとしても、他人のフリ。

偶然二人つきりになっても、甘い雰囲気にはならない。

けど、今の私には皮肉だけれど、それが逆にありがたい。

きつと今以上の関係になってしまったら、私は死ぬのが怖くなる。

もう一度、愛などと言う愚かで醜悪な感情を知らない人形になってしまえば、辛くはない筈。

（大丈夫、大丈夫。私は大丈夫。愛なんて、知らない……。）

「吉乃、大丈夫か？なんかおかしいぞ？」

鬱々と、自分の思考の淵に沈んでいた私は、心配して私に声をかけてきてくれた類の言葉に、「そんな事ないわよ」と、言いたかったのに、あまりの不安定さに、つい本音を口にしてしまっていた。

「ねえ、類。私達、なんで別れちゃったのかな……。恋人じゃなかったけど、付き合ってたのに、約束までしてたのにね……。」

——ごくりッ

類が息を呑むのが判った。

（ごめんね、類。）

人生をやり直せるのなら、やり直したい。

でも、ゲームじゃないんだから、それは叶わない。

悲しみと絶望にも似た、鬱々とした思考に沈んでいた私を、現実
に引き戻してくれたのは懐かしい香りだった。

「なら、なら、やり直すか？お前さえ望めば、いつだって俺はお前
を受け入れてやる余裕はある。俺だって、好きで別れた訳じゃない。
けどな、お前はアイツと別れられるのか？」

誰もいない休憩室。

ほのかに香る煙草の匂い。

たったそれだけなのに、私は昔を鮮明に思い出した。

初めてキスした日、映画を見に行った日、照れながら、二人つき
りで永遠を誓った日。

「るい、るいつ、類っ！！」

「吉乃、やめろ！！唇が切れるぞ。何かあったんだろ？ほら、話し
てみる。誰にも言わないから。」

唇を噛み、類に抱きつき我慢していた私を、類は呆気なく見破り、
優しく背中を撫でてくれた。

「昼休みもそろそろ終わっちゃうな。よし。久しぶりにあそこに飲みに行くか？」

類は意見を聴いているようで、実際は類の中では店に行く事は決定事項。

そんな些細な懐かしさも相まって、私は自然と頷き、約束のキスを交わした。

そこに、なんら罪悪感を感じていなかった。

仕事を定時に終わらせ、久しぶりに行った店は、あの頃と何も変わってなかった。

唯一変わったところと言えば、毎日口喧嘩をしていたオーナーと、バイトの女の子が結婚して、可愛い子供がいた事。

「あゝっ！！吉乃さん、久っしぶりいゝ！！元気だった？」

「おい、仕事しないんだったら帰れ。冬子^{とっし}」

「はっ？ざけんな。このクソ野郎。アタシは吉乃さんに逢いに来ただよっ！！」

そう言いながら、頬を真っ赤に染める冬子ちゃん。

（素直じゃないけど、可愛い。）

吊り目で、私より6歳年下の冬子ちゃんは、喧嘩腰な口調で言い

返ししながら、大きなタッパをカウンターテーブルに置いた。

多分、オーナーの為に作った夕飯だろう。

きつと、オーナーはなんだかんだ言いながら、それを食べると思う。

それは、私と智ではありえない関係。

「まあまあ、冬子ちゃん、落ち着いて？オーナーは冬子ちゃんが大切なよ、判つてあげて？」

「だな。コイツの愛情表現は、冬子ちゃん限定で無愛想なんだよ。愛されてるな？冬子ちゃん。」

私と類にフォローされた冬子ちゃんは、不平不満をぶつぶつ並べ立てながらも、満更でもなさそうに笑みを浮かべた。

——カランツ……。

グラスの中の氷が、音を立て奏で溶け、自身の存在をアピールする。

その懸命な事さえ、今の私には欠落している。

「ところで吉乃さん、結婚したって聞いたんですけど、本当ですか？」

ざわり、と、何かが総毛だったような気がした。
多分、それは嫉妬だったのだと思う。

小さな子供を抱きながら、私の近況を聞いてくる冬子ちゃんを、ほんの少し妬ましかったけれど、私はゆっくりと頷き、自嘲の笑みを浮かべた。

「結婚はしたわ。けど、夫婦間の営みは無いわ。これは内緒だけど、時期を見て離婚するつもり。残された時間くらい、自由に使いたいじゃない？」

お酒の力を借り、口にした言葉は、涙に濡れていた。

（理由なんて、考えるまで無かったわね・・・。）

だからこそ、今の私にはお酒と類が必要だった。

「怖い、類。私、あと、1年位しか生きられないかもしれないんだって。なんで？どうして私なの？」

スキルス胃癌の可能性があるだなんて、言えなかった。

あの家族とは自分から絶縁し、智とは会話すらしていない。

あの人には、私なんかより、キレイで健康な人が相応しい。

（子供も作れない私は、役立たずなの・・・。）

悲しい。

悔しい。

寂しい・・・。

いつから私はこんなにも弱くなってしまったのだろう。

「吉乃の悪い癖は、すぐに我慢するところだ。今日くらいは素直になれ。ほら、コレモ外して。」

自然な動作で、あの結婚指輪を外され、バレッタも外された。

たったそれだけ。

たったそれなのに、私は素直に泣く事が出来た。

肩を震わせ、想いのまま嗚咽を漏らし泣く私は、とても26歳の大人には見えなかっただろう。

ただ、ただ、悲しくて、寂しくて。

髪を優しく撫でてくれる手が、あの人じゃない事も、少しだけ哀しくて。

「なあ、吉乃。お前はもう誰が一番好きか判ってるはずだ。だからそんなに辛いんだよ。仕方ないよな。好きなのに諦めなきゃなんないんだからさ。」

私を諭すかの様に話す類は、私が何を思っているのかを全て理解した上で、傍にいてくれる。

泣いて泣いて。

漸く涙が止まった時、時間は既に深夜の2時を過ぎていた。

「お。やっと泣き止んだな。もう大丈夫か？今日も仕事だし、そろそろ帰るか。」

ウイスキーグラスを片手に、穏やかに微笑む類を見上げ、私は涙を袖で拭って水を飲み干した。

少しだけ吐き気がしたけど、それは知らないフリをした。

「今日はありがとう、類。夏紀ちゃんにもお礼言つといて。」

「ああ、アイツも喜ぶよ。何しろ、俺と結婚する理由も吉乃が好きだからだしな。」

類の苦り切った愚痴を笑って聞き流し、私達はそこで別れた。

結婚指輪とバレッタを、昔の馴染みの店に忘れた事さえ気付かずに。

家に辿り着いた時、リビングから灯りが漏れていたけど、私は何も考えずに家に入り、そして驚いた。

リビングには、顔色の悪い智がいた。

ビールを飲んだのか、リビングにはビールの缶が散乱していた。

「まだ起きてたんですか？珍しいですね……。」

部屋中に散乱している缶を拾いながら、何気なく話し掛けた私は、違和感を感じて、指を見た。

（なに・・・？）

おかしい。

何かが足りない様な気がする。

そして、はつとし、疑問はすぐに解けた。

他ならぬあの人の言葉によって。

「お前こそ珍しいな、こんな時間まで。」

確かにいつもより大分遅い帰宅時間だった。

「指輪もしないで、誰といった事やら……。」

（そうよ、指輪よっ！！）

その言葉で、私は羽織っていた薄手のコートのポケットの中に手を入れたり、鞆の中を探ったりした。

鞆を探った時、密かに役所から貰って、既に記入済みの離婚届が鞆の中でグシャグシャに丸まってしまったけど、その時の私は、とにかく指輪を優先して、探していた。

そして、店に忘れた事を思い出した時、私は迷わなかった。

（確か、あの店はまだ開いてるはず……。）

拾い集めていた缶を放置し、私は真夜中の外へと飛び出して行った。

ごめんね。智・・・。

あの時、一度でもアナタの浮かべた辛そうな表情を見ていれば、私は間違った判断を下す様な事をしなかったと思う。

けど、その時の私は、指輪が心配で、まさかあの人が、智が、私を酷く切ない表情を浮かべて見つめている事も知らず、再び夜の街へと消えていった。

♪、5 離婚届（前書き）

色々変つてと思いますが、大筋は変わりませんので、変でしたら、こっそり（あくまで、優しくお願いします。）教えてください。

♪、5 離婚届

初めて智と逢った時、私は虞と同時に強い恋心を抱いたのだと、今なら素直に思える。

だからこそ、私は心に何重にも鍵を掛けた。

決して傷付かないように、期待しないように、と。

けれど、その心の鍵は既にボロボロに錆び、限界を迎え、朽ち果てる寸前だった。

ならば、残された道は、選ぶ道は一つしかなかった。

したくもない決断を、私は「あの人の為に」、と、下して、逃げた。

テーブルには、温かいご飯と、あの人が好きそうな料理。

好きそう、というのは、この三年間、ろくに会話すらしていなかったから、好きな食べ物や好みが判らないから。

同じ家に暮らしながら、会話らしい会話は殆どしなかった。

（これで夫婦だなんて・・・。）

それも今日で終わりだと思えば、少し寂しい。

その為に、今日は会社側に無理を言って休み、一日を掛けて私物

をまとめ上げ、私が住んでいた痕跡を綺麗に消した。

最後の仕上げに、私は少しだけ化粧をして、あの人を出迎える。

「お帰りなさい、智さん。」

出来る限りの笑顔を浮かべ、仕事から帰ってきたあの人を、智を迎えた。

おそらく結婚式以来の微笑みで、私は智を見上げていたのだろう。

「お仕事お疲れさまでした」

普段とは異なる私の態度に、智はじつくりと観察し、まるで壊れ物を扱うかのように抱きしめてくれた。

存在を確かめつつ、そして、決して離さないという意識が伝わってくるような、温かい抱擁。

その抱擁は、私が病気を知る前だったのなら、素直に受け入れられていた。

でも、もう私は知ってしまった。

（もう、過去には戻れない・・・。）

愚かにも、勝手に抱き返そうと動き出していた手を、ギリギリのところで抑え、智の肩にかけ、やんわりと突き放す。

「吉乃・・・？」

ここで疑問を持たない人間なんて、誰もいない。
智だって気付いてる。
それでも私は辞めない。

「ねえ、智さん。私の事、少しだけでも愛してくれてる？」

（私は、狡い。）

憎んでくれてもいい。
いや、憎んでほしい。

解っていても、どうしてもこの手を使わずにはいらなかった私を。

（ごめんね、貴方は最初から優しくかったのに。最初から最後まで・・・）

身体を重ねなかったのは、私が初夜の日にフラッシュバックを起
こして拒否したり、体調が優れなかったから。

それを私達の中に愛がないと勝手に決め付け、すり替えたのは他
ならぬ私。

「智さん、離婚して下さい。」

この言葉は、私から貴方への、最初で最後の愛の言葉。

「愛してるなら、私と別れて下さい・・・。」

心の奥底では、別れたくないと泣き叫んではいるけど。

これは貴方の、智の為だから。

「私、好きな人ができたんです。お腹に、その人との子供もいます。彼となら、私、幸せになれるような気がするんです。」

極上ともいえる微笑みを、必死に作って、浮かべた。

その必死な一世一代の演技は見破られることも無く、相手を確実に傷付けた。

どれだけ時間が経った頃だろうか。

智が出した答えは、私を驚かせ、そして安堵もさせ、少しだけ狼狽させた。

「吉乃、別れるも何も、俺達は最初から夫婦でもない。だから勝手にしろ。」

（今、何て言ったの？最初から夫婦じゃなかった？）

「お前と夫婦だった事など一日たりともない。目障りだ。さっさと出て行け。」

苛烈な怒りと言葉。

その言葉が、声が、私を徐々に支配し、そして、最後に私の表情を完全に支配した。

心とは正反対の、とても穏やかで、幸せを掴んだような微笑みと口調で、私は別れの言葉を口にした。

「今日まで一緒にいて下さり、ありがとうございました。いつまでもお元気で。幸せになって下さい。」

頭を下げ、スタスタと寝室に荷物を取りに行き、一応、記入済みの離婚届をダイニングテーブルに置き、私は智に真実も行き先も告げずに、家を出た。

外は雨が降っていたけれど、それは今になって溢れ出した涙を隠すには、都合が良かった。

まるで、お風呂の浴槽が引っくり返された力のような、激しい雨に打たれながら歩き、私が辿り着いた場所は、つい先日、運び込まれたばかりの罹りつけの病院だった。

緊急搬送口兼入り口に、びしょ濡れ姿で現れた私を見つけるなり、その場に偶然居合わせた看護師さんは、私の傍まで走ってきた。

「菜々宮さん？こんな時間にどうされたんですか？」

（驚くのも、無理ないわよね・・・。）

ただでさえ、診察時間は過ぎているというのに、更に私は大きな鞆を持っている。

「まさか、入院しに来たの・・・？」

信じられない、と、その声は感情を伝えていた。

私はその言葉を肯定するようにゆっくりと頷き、決意を込めた、

しっかりとした声で返事をした。

「よろしく願います。もう、身体中が痛くて、我慢できないんです。」

大切なものは全て捨ててきた。

だから私はもう、何も怖くない・・・。

♪、 5 離婚届（後書き）

一端、区切ります。

次回、短いからです。

♪、 6 別れた姉の真実（前書き）

今回は利依さん視点です。

♪、6 別れた姉の真実

私、綾橋^{あやはし} 利依^{りい}、27歳。

私には少し年の離れた兄さんがいる。
その兄さんの様子が、最近どこかおかしい。

急に実家に帰ってきたかと思えば、新築して3年しか経ってない
マイホームを売ったり、（これはお父様が内々に買い取った。）得
意でもないお酒に手を出してみたり。

そして一番おかしいのは、あの義姉さんを手放した事。

あらゆる手段や伝手を駆使して結婚したのに、どうして離婚した
のだろう。

兄さんは義姉さんが浮気して、別れて欲しいと言われたから、別
れてやったと言っているけど。
だけどね？

（そんな事、信じられる訳ないでしょ！？）

確かに兄さんは無愛想で誤解されやすい人だけど、本当はとても
繊細で孤独で、誰よりも脆い人。

小さな頃から宗一兄さん^{そういち}と常に比べられ、綾橋の帝王学を叩き込
まれ、完璧を求められてきた兄さん。
そんな兄さんに近づいてくる人達は、みんな綾橋の財産と名前、
兄さんの容姿だけが目的だった。

兄さんもそれを知っていたから、ある時期から女性とは付き合いはしても、結婚だけは絶対しようとしなかった。

その兄さんが3年前、日本に帰国して少したった頃、初めて私達家族に結婚しても良いと、一人の女性の写真を見せてくれた。

泣き黒子が印象的な、大人しく、儂く、穏やかに微笑む可愛い女性^トだった。

それが今回浮気して、兄さんの所から去っていった義姉さん、菜々宮 吉乃さん。

義姉さんは私より一つ年下だったけど、兄さんを良く支えてくれていた。

お父様やお母様さえ知らない、食の好みも完全に把握していた。兄さんも義姉さんを本当に愛してた。

兄さんと義姉さんは、私の理想の夫婦像だった。

（なのに、どうして？どうしてなの？義姉さん。）

兄さんが急に家に帰ってきた日、兄さんは離婚届を手に持っていた。

そしてその夜、私達家族は驚きのあまり、氷の様に固まってしまった。

あの、何が起きようとも決して表情を崩さない、見せない兄さん、

一部の人達からは冷酷とさえ言われている兄さんが、肩を震わせ、涙を流し、私達家族の前で泣いたのだから。

（義姉さん、どうしてなの？兄さんのどこが悪かったの？）

兄さんの事で、これ程驚いたのは、この時が初めてだった。

兄さんの初恋は、間違いなく義姉さんである、吉乃さん。

兄さんは、その初恋の相手である義姉さんから離婚届を突き付けられた。

（辛いよね・・・、これは。泣くしかないかも。）

でも、驚くのはまだ早かった。

兄さんも変な所で人が良いのか、単純なのか、夢見がちなのか、籍も入れてなかったと、これまた爆弾発言をしてくれた。

兄さん曰く、

『本当に信頼してもらえ、許して貰えたら、籍を入れるつもりだった』

（兄さん、今時、そんな人何処にもいないから！！）

その日から、兄さんの感情や表情から「笑顔」や、「微笑み」、「喜び」は消え、昔の蠟人形みたいな、冷たい、温もりの欠片も感

じられない兄さんになってしまった。

*

私がある日、その病院にいたのは、不眠症になってしまった兄さんの為に、仕事で忙しい兄さんに頼まれ、代わりに眠剤を貰いに来っていたからだった。

だけど、私はその日の偶然を、後になって深く感謝した。

（どれだけ待たせんのよ！！予約時間過ぎちゃってるじゃない！！）

苛々と診察室の待合室で待っていた私の耳に入ってきたのは、ここには居るはずのない人の声と名前。

「菜々宮さん、本当にご家族には連絡できないんですか？これは貴女の命にかかわる重要な事なんですよ？」

「…………、良いんです。私には家族なんていませんから。」

「菜々宮さんっ！！」

（ウソ、でしょ？どうして義姉さんが・・・？）

兄さんは義姉さんが浮気して、出っ行ってたと言っていた。なのに、どうしてここにその『義姉さん』がいて、声がするのだろうか。

私が何も出来ないでいる間にも、義姉さんの苦しそうな声は響い

ていた。

（義姉さんが消えて、兄さんと別れて今日で二週間。）

「もう、放っておいて下さい。私の命は私のだけのもの。私が死んだって、誰も悲しんだりしないわ！！」

廊下にまで良く響く声は、どんなに願っても、間違いなく義姉さんの、弱々しく、悲しい色が混ざり合ったものだった。

「まただわ。」

「ええ。でも、あの子も可哀想な子ね。よりによって進行性の癌だなんて……。」

――もう、手術も手遅れなんですって。

勝手な事を言わないで欲しかった。

（義姉さんも義姉さんよ！！）

ヒソヒソと囁き合う他の人達の言葉が、何よりも義姉さんの言葉が、私の胸を深く抉り、斬りつけ、傷付けた。

（迷ってる暇なんて、迷う必要なんで、ないわ。）

私は兄さんの眠剤も受け取らず、急いで家へ帰った。

今ならまだ間に合うかもしれない。

それは根拠も理由もない、ただの勘だった。
けれど、私はその勘を、不思議と外れる事がないと、確信していた。

♪、7 零れた本音と、温もり

（今日で、入院してから一ヶ月。）

もう、世間では真夏を迎えるべく、梅雨入りしていて、日本独特の蒸し暑い気候に晒され、それでもこの初夏を楽しんでいる。

（だけど、私は。）

この白くも狭き、快適な牢獄に、望んで収まっている。

病院側には頼み込んで、面会謝絶にしてもらっているから、お見舞いに来る人達はいない。

いや、入院している事さえ、誰も知らないし、私も知らせてはいない。

私が入院している事を知っているのは、病院側の先生と、どんな因果があるのか、智の従弟であり、私が個人的に雇った弁護士さの咲田きた 紘一こういち、28歳だけ。

彼は優秀で、依頼人が私であるという事を知ると、すぐに動いてくれた。

そんな彼のおかげで、私の退職手続きは、彼を通して迅速に全てやり遂げられ、受理された。

それで、今の私に残されているのは、『菜々宮 吉乃』という名前と、性質の悪い病と、少ないと言えない預貯金だけ。

もし、生き長らえる事が出来るのなら、お金の使い道はたくさん

あるだろう。けど、死ぬのなら、残したい相手がいる。

受け取って貰えるかは分からないけど、受け取って欲しいと思うのは、私の我儘だろうか。

（虫が良すぎるかしら、ね？）

ふ、と、微かな衣擦れの音に、そんな事を考えつつ、夢と現の間を気持ち良く彷徨っていた私は、目を開いて、そこにいるはずのない人達の姿を見て、驚いた。

（どうして、いるの？）

「吉乃さんっ！！」

驚きつつも、生きる気力も、努力する心も失った私を見て、ギョツと、勢いよく、すっかり痩せ細り、女としての魅力のなくなった私の身体に抱きついてきたのは、あのお馴染みの店の「club・シークエンス」の冬子ちゃんだった。

その冬子ちゃんを呆れつつも、温かく見守っているのは、彼女と結婚したクラブのオーナー。

冬子ちゃんのいつもと変わらぬ態度と雰囲気、驚きと戸惑いに揺れていた私は、再び「吉乃さんっ」と、呼ばれた事で、漸くこれが現実なのだと受け入れられた。

「吉乃さんはなんで私達がつて、思ってるんでしょ。答えは簡単。私のお姉ちゃんが吉乃さんの担当ナースだからだよ。」

私の担当ナースは、主に二人。

女性は神向 紗千さん、男性は高江 槇さん。

二人とも、とても私に親身に接してくれている。

それで冬子ちゃんのお姉ちゃんが、私の担当ナースだというのなら、神向さんしかない。

「神向さんが？」

私の質問に冬子ちゃんは頷いた。

だけど、冬子ちゃんは神向さんと全く似ていない。

「似てないと思ってるんでしょ。当たり前だよ。私は親父の愛人の子供だし。」

冬子ちゃんは疑問に思っただけ。とばかりに、私の疑問をザックリと解決し、私の身体を解放し、表情を改めた。

その冬子ちゃんのいつもと違う雰囲気、私は嫌な予感がした。

（やめて、お願いだから、やめて。そっとしておいて。）

――やっとなら全部、諦められると思ったのに。

そして、その私の嫌な予想は的中した。

「吉乃さん、なんで何も言ってくれなかったんですか？そんなに私達の事、信頼できないんですか？はつきり言うと、時々、吉乃さんという虚しかったんですね、まるで私達が存在してないように

無視されて」

・・・ドクリッ・・・。

心臓が、強く、脈を打ち始める。

（やめて、それ以上、言わないで。）

私の願いは天に通じる事無く、冬子ちゃんはペラペラと話し続ける。

「知ってます？そーゆーの、独り善がりって、ゆーんですよ？あ、あとは自己陶醉とか。とにかく、自分だけが不幸だと決めつけて、自分が作り上げたその架空の世界で、それに酔っちゃうんです」

冬子ちゃんの言葉が痛かった。

冬子ちゃんの言葉は、否応なく私の心の扉を蹴り、殴りつけてくる。

現実から目を逸らすな。

きちんと立ち向かえ。と。

けれど人は、時としてそれを酷く厭う。

そして、私の心の番人は、扉を決じ開けようとした無頼者を、凍てついた態度と口調で追い払う事を選んだ。

（何も知らないお前に、何が判る！！）

心を、耳を、感じ得る全ての感覚を閉ざし、抵抗する。

「何か言ったらどうですか？」

冬子ちゃんの目には、憤りの炎が爛々と宿っていて、私を強い眼差しで貫いていた。

本気で心配してくれているのが判るのに、それが逆に嫌で、憎くて、私の口から零れるのは、鬱屈した拒絶の言葉だけだった。

「誰が、心配してくれだなんて、言いました？」

自分でも、よくここまで怖い声が出せるな、と思うくらいの、囁れた、低く冷たい声は、冬子ちゃんの言葉の前には無力にも等しかった。

その証拠に、冬子ちゃんは鼻笑いを漏らすなり、激しい口火を切った。

「は？心配？笑わせんな。アタシはアンタなんかの心配なんざしねーよ。アタシは姉ちゃんを困らせてるアンタがム力つくんだよ。」

普段なら気付く、冬子ちゃんの口調の変化に、私は気付けなかった。

そこまで、私は攻め込まれ、心の余裕がなかった。

私はあからさまな冬子ちゃんの挑発に、まんまと嵌められていた。

目の前で、でかい態度で椅子に座り、挑発してくる人が憎くて、

妬ましくて仕方がない。

「・・・ったら、だったら早く帰ればいいじゃない！！こんな、もうすぐ死ぬかもしれない私なんか放っておいて！！」

（そうよ、私は誰も来て欲しくなかった！！）

私の言葉に、冬子ちゃんのキレイに整えられた眉が、ピクリ、と、微かに動いたことも私は見逃した。

「誰も私なんか死んだって、悲しまないわ！！」

「え・・・？死ぬって、どういう事・・・？」

判ってるくせに、と、私は晒った。

「白々しい。神向さんから聞いたんでしょ？私が進行性の胃癌に侵されてるかもしれないって！！余命も宣告されて、一年位しかないって」

私の激しい剣幕に、わらわらと人が集まってくる。

その中には、加賀見先生もいた。

「なにも知らない癖に、私がどんな思いでいたか解る！？」

脳裏に走馬灯のように駆けていくのは、女として、そして妻としての屈辱に満ちた耐え難い日々の数々。

心を空にして、愛さないように自分自身に暗示を掛け続け、騙しながら生活してきた日々。

「目の前でキスされた事はある？　ないわよね？　ない人には判らない感情でしょうね。いつかは、いつかは私を見てくれるんじゃないかって、私だけを選んで、見てくれるんじゃないかって。何度も何度も期待しては裏切られてっ……。」

ゲホっ、ゲホっ、と、咳をした瞬間、口の中に広がった鉄の味に、私は愕然とした。

ガクガクと、小刻みに震えだした自分の身体に、私は発狂しそうになった。

自分で吐いた血が、信じられない。

（怖い、コワイ、こわい。）

「吉乃さん……？」

すっかり困惑した様子の冬子ちゃんが、私の背中を擦ろうとした。だけど、私はそれを拒んだ。

「なんで私なのよ！！　なんでこんなに苦しいのよ！！　死にたくないのに、本当は愛してる好きだって言いたいのに、私だけだって言うて欲しいのに、どうして私なのよ！！」

どうにもならないもどかしさから、錯乱しかけた私は、ついに、言っではならない言葉を口にしてしまった。

「疲れた……、もう、死にたい。こんなに辛いのは耐えられない……。もう、何もかもが、嫌……。」「

それは生きる事を諦めた事を意味する、負の感情、負の言葉。

（死ねば、楽になれる？）

出来る事ならば、元気になって、全てをやり直したい。

けど。

クスクスと、暗く、歪んだ笑い方をする私は、もう尋常な人間には見えなかっただろう。

実際、私には誰も近付こうとはしなかった。

冬子ちゃんでさえ、私に声をかけるのを躊躇っていた。

そう・・・。

たった一人、あの人を除いては・・・。

ギュツと、いきなり抱きしめられた私は、暫く自分の身に何が起きたのか、理解出来なかった。

理解できたのは、抱きしめてくれた人の、声、香り、そして、何よりも求めていた愛しいヒトの温もりが伝わってきてから。

（うそ・・・、うそ・・・っ）

「吉乃・・・、もう我慢しなくて良い。もう、全部判ったから。だからそんなに悲しそうに、全て諦めたように泣くな。・・・、俺が

いるから。」

——守るから。

と、穏やかに言われた言葉。

抱きしめられ、感じた温もりは、私が諦めていた人のもの。

「吉乃……？」

（どうしよう……。嬉しい……。）

あまりにも嬉しくて、信じられなくて、夢じゃないか確かめたいのに、私の身体は智から中々離れなかった。

ついさっきまで死にたいと願っていたのに、なんて幸せなのだろう。

（夢なら、覚めないで……。）

そう願い、思った瞬間、私は猛烈な眠気に襲われ、智に抱きついて腕から、力が抜けた。

「吉乃……。？吉乃！！」

智の悲痛な顔が見える。

（ああ、そんな顔しないで？疲れて、少し寝るだけだから。）

ゆつくりと沈んでいく意識の中、私は、かろつじて微笑んだ。

「智……、大好きっ……。」

これが限界だった。

グラッと、頭から倒れた私は、智の心配をよそに、それから三日三晩、昏々と眠り続けた。

その間見た夢は、最高に幸せで、涙が枯れるほど嬉しいモノだった。

♪、7 零れた本音と、温もり（後書き）

次回に続く。

♪、 8 名前？（前書き）

これからどんどんありえない展開に転んでいきますが、どうか批判はなしの方向でお願いします。

♪、8 名前？

夢なら永遠に醒めないで欲しい、と、確かに私は初めて、心の底から誰かに願ったかもしれないけど。

窓からきらきらと朝日が降り注ぎ、その朝日の眩しさで眼裏を刺激され、仕方なく嫌々ゆつくりと瞼を押し上げれば、まず最初に、ここ一ヶ月間もの間にすっかり見慣れた、薄いモスグリーン色の天井が目に入ってきた。

私に与えられている病室は個室で、基本的にモスグリーンと、水色、それからオレンジ色で統一されている。

天井はもちろんのこと、壁紙やカーテンも薄いモスグリーン色で、コップや洗面具は水色、パジャマや差し入れの本のブックカバーや花は、少しでも私の気分が明るくなるようにと、全てオレンジ色系の暖色。

これらの身の回りを整えてくれたのは、紘一さん（お世話になっているから、これからは『さん』づけにする。）と、看護師の二人。

何回か眼が慣れるまで瞬きを繰り返し、枕の上で首を右に向け、目覚まし時計で時間を確認しようとした時、私の眼に飛び込んできた光景に、私は一瞬、ここが病院である事を忘れた。

私が見たものは、智の寝顔だった。

しかも髪は乱れ、寝ている時でも色気を無意識に放っている。

ここで言っておきたいのは、私と智は新婚旅行さえ行っていない
仮初の夫婦だったという事。

（何か、寝ている時も色気があるって・・・、）

寝起き、しかも今は病身の身である私には、衝撃的すぎて、そして、心臓に悪くて、目の毒にも等しいものだった。

そのせいで、目覚めたばかりだというのに、心拍が上がり、暫く何も出来なかった。

出来たのは、穴が出来るんじゃないかと思われるほど、その寝顔を見つめ、隅々観察する事だけ。

そうして、心ゆくまで観察した私は、寝乱れていた智の髪を直そうとして、初めて自分の手が、大きな智の手に、包み込むように握られている事に気付き、面映ゆうくなった。

智の手は、意外にも小さな傷や火傷の痕があり、とても社長として君臨している人の手とは思えなかった。

そこで思い出したのは、私が入社した時の社長が、綾橋のお義父様だったという事。

（私、貴方の事、何も知らないのね・・・。）

改めて、私達は何の努力もしていなかった事を思い知らされた。

そうして考え込んでいる間にも、時間は刻まれている。

眠りが浅いのか、智は私が少し身動きしただけで、鋭くも魅力的

な瞳を開いた。

（写真でも撮っておけば良かった・・・。）

ついつい、唇を尖らせてしまったのは、そんな良からぬ事を考えていたから。別に不機嫌だった訳ではない。

ただもう少し智の眠りが深く、手元にカメラがあったら、と、思っていただけ。

智は、そんな私の不貞腐れた顔がお気に召さなかったのか、私の手を離れたかと思いきや、ベットの柵を外し、枕と頭の間に腕を入れ、覆い被さるように私の唇を、自分の唇で塞いできた。

何度も言うが、今は寝起きで、しかも本来は清々しい筈の朝である・・・。

ここ最近は何雨空だった空も、今日は久しぶりの青空が広がっているというのに。

智は私がどこか冷静だったのを、感知したのだろう。

徐々に深く執拗になってくるキスに、私はすぐに酸欠状態に陥り、掴まれていなかった左手で智の背中を何度もバシバシと強く叩き、それで解放してもらえた。

唇が離れた時、智が自分の唇を舐めたのを見た瞬間、猛烈に恥ずかかった。

顔から火が出るのではないかと、本気で思ったし、顔が熱かった。それを誤魔化すため、私は身体をベットのの上に起こし、何度か深

呼吸を繰り返し、本音混じりに呟いた。

「……………殺されるかと思った。」

目覚めておそらく一時間もしない内に、今度こそ死神に永遠に目を醒ませない世界へと、連れて行かれるのではないかと思った。

それは嫌だ。

いくらなんでもそれは嫌すぎるし、早すぎる。

ブチブチ文句を並び立てていた私を見ながら、智はさっきまで自分が座っていたパイプ椅子に座り直すと、足を自然に組んだ。

そして。

「何か言う事はないか？吉乃。」

真っ平らに近い胸元を撫でながら、羞恥心や、その他の感情を整理していた私は、智のその言葉の意味が理解できなかった。

少し考えてから、そう言えばと、思い出した。

忘れてはいたが、それでも智は古くは公家の流れを汲む、名家の跡取り息子。

世が世なら、貴族である。

なので挨拶や礼儀には、殊の外煩いし、厳しい。

さて、ここで私はなんと返した方が良いのだろう。

（呼び捨ては不味いわよね。かといって、今更、智さん、なんて呼

べないし、夫婦でもなかったんし……。そうか！！）

「おはようございます、綾橋社長」

これが正解だろうと、胸を張って答えた私に、智は「違う」と、小さく返した。

何が違うのだろう。

智は何が言いたいのだろう。

（なんなの？ 違っって何？）

モヤモヤしていた私の注意を惹くように、智は私の顎を長い指で拘束し、正面を向かせ、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「心配したんだぞ、なんで本当の事を言わなかった……。俺だけじゃない、利依も、親父も、母さんも、みんな……。」

そつと顎を解放され、智の手はそのまま私の髪を撫で、額にかか
る髪をかき上げ、そこに小さなキスが落ちてきた。

それはまるで、小さな子に、親が宿めるような優しいものだった。

♪、 8 名前？（後書き）

事情により、一端区切ります。

♪、 9 名前？（前書き）

まだまだ先は長い・・・です。

少し原作のモノより書き足したり、書き換えてるので、原作を読める方々には申し訳ありません（原作といっても、作者が書いたものです。）

♪、9 名前？

——誰かに頭を撫でてもらうのは、類以外では、初めてだった。

ほんわかと、心が暖かくなって、無意識の内に口元が緩みかけていた私は、そこでふと、一つの疑問にぶち当たった。

三日三晩眠っていたせいで、頭を少し傾げた時、凝り固まった筋肉がゴツリツと、凄い音を立てたが、そんなことは構ってられない。

私は目覚めてから、朝に相応しくないキスを智にされた。
その智が、なぜ、どうしてここにいるのか。

（あれは、夢じゃなくて現実だったの？）

人は基本的に、自分の都合に悪い事を忘却したり、夢だと思いこむ事がある事は、知識としては知っていて、それが自分に起こる事はないだろうと、私は今まで漠然と構えていた。

しかし、現実はどうそう甘くはなかった。

浮かんできた答えと云うべきか、自分で導き出した答えに、私は自分の顔から炎が出るのではないかというくらい動揺し、とりあえず、先程から私の返事を黙って待っている智にすべく、心持、作った声と顔で謝罪した。

「心配をお掛けしまして、申し訳ありませんでした。後日、お礼に上がります。」

あくまで、生きていたらの話である。

智は私のそんなシラツとした態度と、言葉の何処がおかしいのか、ククク、と、喉の奥で笑いをもらし、乱れた髪を左手で掻き上げた。

その際、ワイシャツの袖口部分を止めていたカフスが、太陽の光を反射し、きらりと光りを弾き、紅く輝いた。

私とそのカフスに目を捕られていると、智はそのカフスを外しながら、愉快そうに言葉を紡いだ。

「随分、他人行儀だな……。覚えてるんだろう？吉乃。」

——ミシッ。

ベットが軋む音がし、いつの間にかまたベットの上で、耳元まで迫られていた私は、両手で顔を隠した。

左腕には点滴が挿され、腕を曲げると少し痛かったけど、そんな事は構ってられなかった。

なのに智は、そんな私を、まるで鼠を追い込んだ猫のように、からかう様に耳に息を吹きかけながら、早く名前を呼べと、催促する。

「ほら、遠慮するな……。呼んでみる、吉乃。」

安い少女漫画や、生チヨロい三文小説でしか見聞きしたことのない展開に、誰が抵抗できようか。

いや、できないはずだ。

（お願いだから、そんなに近づかないでえ〜！！）

色気満載の声色で、少なからず好意を抱いている相手から、自分たちの二人以外、誰もいないところで、迫られている所を想像してみたい。

誰もが陥るであろう症状に、私も敢無く嵌った。

熱湯で茹でられたタコの如く、首から上が全て真っ赤に染まった私は、降伏の証に言葉を発した。

「さと・・・し・・・っ？」

最後の最後で、末尾に疑問符を付けたのは、せめてもの抵抗である。

いくら普段は内心で呼び捨てにしても、実際に呼ぶとは大違いである。

（名前を呼ぶのが、こんなに恥ずかしいなんて・・・ッ）

ドクドクと早鐘を打つ心臓を宥めつつ、両手を顔から離れた私に待っていたのは、初めてみる智の表情だった。

智は蕩けんばかりの、凄絶な甘さと妖艶さを含んだ、美しい微笑みを浮かべていた。

人は誘惑には勝てない、ダメな生き物だと、私はこの短い時間の内に実感し、それを身をもって体験した。

私は甘い砂糖に誘われた蟻のように、智に全神経を向けた。

言葉なく絡み合う視線。

それに伴い、病室には相応しくない、甘い空気と雰囲気が漂う。

その雰囲気促されるまま、私は瞳を閉じ、智を受け入れ、智の後頭部に腕を回した。

重なっては離れ、離れては重なり、それが何度か繰り返されたあと、智は私の耳をペロリと舐めた。

耳を舐められた私は、その淫靡な甘さに、身体がピクリと反応してしまった。

（か、身体が熱い、恥ずかしい。）

しかし、誰もいなくて良かったと、安堵のため息を吐こうとした時、その声はした。

「あら、目が覚めたの？」

ひゅっと、智が息を呑むのが判った。

きつと、彼も知らなかったのだろう。その証拠に、少しだけ、声が低い。

「・・・――、母さん、いつからそこにいたんですか？」

「なあゝに？私がいちゃあ悪かった？さつきからよ？」

ふふふと、妖しげに、明るく笑いながら姿を現したのは、智の母親であり、私の憧れの女性でもある、綾橋 さくら さんだった。

♪、 9 名前？（後書き）

姑のさくら、登場です。

続き、投稿した方がいいですか？

まで、次回。

♪、10 姑・さくらの策略（前書き）

大分、細切れで改題しています（笑）

♪、10 姑・さくらの策略

綾橋のお義母様こと、綾橋 さくらさんは、50代とは思えない若々しさと、スタイル、美貌を持つ人。そのせいか、さくらさんと一緒に街を歩けば、ほぼ百パーセントの確率で声を掛けられている。

ベットを覆う、薄い緑色のカーテンを手早くまとめたさくらさんは、顔を綻ばせ、私に歩み寄ってきた。

「さあ、吉乃さん？顔を良く見せて？」

いつも笑顔を絶やさないさくらさんは、それと同時に非常にマイペースで、人がどんな状況にしようが、遠慮は一切ない。

アレを見られ、聴かれていたんじゃないんだろうかと、モヤモヤ考えていた私は、それでも心配と迷惑を掛けてしまったのだし、と思いなおし、ゆっくりと伏せていた顔を上げた。

さくらさんは満足そうに微笑みながらも、私の頬に手を伸ばし、柔らかな手つきで私の顔を挟み込むように包んだ。

そして――。

「あらあら、すっかり痩せちゃって。どうせウチのバカ息子のせいでしょうけど。ごめんなさいね、吉乃さん。」

頬にあっただはずの手が、あっちをペタペタ、こっちをペタペタ、私の女として魅力のない身体のありとあらゆるところを撫で擦り、

触れてくるさくらは、同性とはいえ、とても智の母親とは思えないほど躊躇いもなく、コミュニケーション能力が高いと思った。

「痛むところはない？ 具合はどう？ 吉乃さん、貴女には綾橋の女として、この綾橋の家を継ぐ子供を産んでもらわなければならないのだから、病気には負けてはいられないわよ？」

——綾橋の女。

その言葉を聞いた瞬間、私の心が急激に冷えていくのが分かった。

（私は、私だわ……。誰のモノではないのよ）

暗く淀み始めた私をそのままに、さくらは尚も熱く熱弁を続ける。

「だから、絶対病気になるか負けないで、一緒にお家に帰りましょう？ 智さんの妻は貴女しかないのだから。」

（智の妻は私しかない？）

意味が判らない。

だいたい、私と智は夫婦でさえなかったのに、今更そんな事を言われてもどうにもならない。

智にどういう事だ、という意見あいの込めた視線を向ければ、智はあやふやに笑って誤魔化した。

確かさくらは、綾橋の女としてと、言った。
でも。

（なんで、こんなに胸が痛むの？）

これが最善だと思って行動し、決行したあの日。

今更胸が痛むなんて、図々しいし、女々しい。そして何より醜い。

徐々に自己嫌悪に陥り、暗くなり、俯いていく私に、智とさくらさんは私に言葉を掛ける。

「吉乃さん？どうしたの？」

「吉乃、顔を上げる。」

そんな事を言われても、顔は中々上げられない。

手前がってな感情だけれど、情けなくて、悲しくて、切なくて、顔なんか上げられないし、こんな顔なんか見せられない。

私の心の中で、ぐちゃぐちゃに攪ぎ合う感情と理性。

中々顔を上げられないでいると、さくらさんは持って来た鞆の中から大きな花瓶を取り出し、それをベットから少し離れた所にあるテーブルに置いた。

花瓶は艶やかな白磁に、紅い染料で格子模様が引かれている質素なものだった。

「そうそう、言い忘れていたわ。」

さくらさんは機嫌が良いのか、鼻歌を歌いながら、まるでそれが当然だという様にけろりと言った。

「吉乃さんと智さんの婚姻届だけど、提出しておいたからね。これで名実ともに吉乃さんは私の可愛い娘よ。ああ、早く可愛い孫の顔が見たいわ」最低、三人は欲しいわねえ。」

「・・・!!」

驚きと孫発言に何も言えず、漸く上げた顔をさくらさんの方へ向ければ、さくらさんはウキウキと向日葵の造花を花瓶に生けていた。

（なんでそんなに明るくて、楽しそうなの・・・。）

こっちは混乱してるのに・・・、と、恨みそうになった時、さくらさんはくるりと振り返り、にやり、と黒い微笑みを浮かべ、智を見た。

さくらさんはその黒い微笑みを湛えたまま、黄色いクマのぬいぐるみを私のベットのサイドテーブルに置き、温かいお湯の入った洗面器と、タオルを何本か用意した。

さくらさんは手早くタオルを洗面器のお湯に浸して搾り、有無を言わさぬ勢いで迫ってきた。

「さあ、吉乃さん身体を拭くから、パパッと服を脱いで頂戴？」

言う事とやる事が人と違う。
それもさくらさんの特徴だった。

さくらさんは私が着ていた病衣の紐を解き、容赦なく上着を剥ぐように脱がし、慣れた手つきで絞ったタオルで身体を拭いていく。

抵抗むなしく、剥かれた私は背中を丸めるしかなかった。その首もとで揺れる、小さな指輪。

その指輪を見たさくらさんは、更に笑みを深くした。

「まあまあ、吉乃さんったらなんて可愛いのかしら。それ、智さんが吉乃さんにあげた指輪でしょ？」

ちらりと、意地悪気に智を見て、ふふふと、笑いを漏らす。

「それはね、実は私が智さんに頼まれて、デザインから装飾まで全て手掛けた、唯一無二の特別なお嫁さんの為のモノなの。ね？智さん。」

そこで話を振られた智とバッチリと視線が合い、私は体温がドンドン上がるのが判った。

「うえ・・・？」

「あら、どうしたの？あなた達、顔色が真っ赤に染まっていますよ？」

さくらさんは策士だ。そうに違いない。

私と智が真っ赤になるのは当然だ。

私達は身体を重ねるところか、お互いに明るい場所で肌を晒した事もないのだから。

さくらさんは冗談半分だったのだろうか、私と智がなにも反応しない所を見て、口元にタオルを持った手を持っていき、大袈裟に嘆いてみせた。

「まさかとは思つけど、智さん、貴方、まさか、まさか・・・、なの？」

さくらさんが言いたい事は、痛いほどわかる。

仮にも2・3年近くも一緒に男女が住んでいて、そういう関係になつてないのは、世間一般的にはありえない。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

無言が肯定だと取ったのだろう。

さくらさんは急に両手をパンと叩き合わせ、にっこり微笑んだ。

「智さん、私、吉乃さんの病状を先生から聞いてくるから、後はヨロシクね？——全身、拭いてあげるのよ？」

ハイテンションでタオルを智に渡し、最後は智を焚きつけるように言い、私に意味の判らない「頑張つて」という言葉を残し、部屋を出つて言った。

（お義母様、何を頑張れと仰るのですか！！）

さくらさんが出ていった病室は、妙な沈黙が流れた。

でも、その沈黙は長くは続かなかった。

ふうーッ、と、長い溜息を吐いた智は、着ていたジャケットを脱ぎ、腕まくりをした。

カフスは既に外され、サイドテーブルに置いてあったから、行動も早かった。

洗面器に張られたお湯にタオルを浸し、固く絞り、腕を優しく拭いてくれる。

「その指輪、持ってたんだな。」

「え、ええ。」

「どうりでな……。探してもなかったはずだ……。」

静かな病室、静かな口調での会話。
でもそれが心地よかった。

この指輪は初めて貰ったものだった。

結婚指輪はダメでも、これなら赦されるだろうと、あの日、こっそりと荷物の中に忍び込ませたのは、私の微かな未練と醜い感情。

素直になれなくて、だけどこれだけとはと。

ちつとも豪華ではないけれど、単なるチューリップの華が繊細に彫られた細い指輪だけ。

「初めて逢った時に貰ったものだから・・・。」

「・・・、吉乃の好みも知らない時に贈ったモノだからな。だから、気に入って貰えるか判らなくて、苦勞もした。」

智曰く、記念日には私に何かを贈りたいと思っていきたいらしい。けど、私が何も言わず、会話もせず、話し掛ける事も出来ず、花を贈る事しか出来なかったらしい。

そう言われてみれば、良く花束を持って帰ってきていた。

（なんだ・・・。）

今思えば、それが不器用な智らしい愛情だと、素直に理解出来、受け取れる。

クスクスと笑っていると、プチンと、ブラジャーのフロントホックが外された音がした。

「吉乃は着痩せするタイプだったんだな。知らなかった。」

（なっ！！）

淡々と身体を拭いていく智は、さらりとそんな事を言う。

私は平静を装いながら、言い返した。

「き、着痩せって。それほど大きくは・・・。たったのBだし・・・。」

「胸がデカイだけの女は好みじゃない。」

こんな状況で交わす会話は、なんだかとても気恥かしい。

恥ずかしくて顔を伏せてしまった私は、その痛みに吃驚した。

首筋、項、右耳の後ろにチクリと走る痛み。

思わず、吐息が漏れる。

「んあっ・・・、イア・・・、フう。」

その痛みは、決して痛いだけじゃない、甘い痛み。

耳元で濡れた音がし、左耳を甘噛みされた途端、私の身体は素直になっていた。

「ふぁ・・・っ、あっ・・・っ。」

クスリ、と、愉悦に染まった智の笑い声。

「吉乃は本当に耳が弱いな。」

撫でられている背中が、腹部が、むず痒くて熱い様な気がするの
は、きっと気のせいじゃない。

ゾクゾクしたり、疼いたりするのも、触れている人が好きな相手
だから。

ふるふると快感に震えていた私は、自分でも気付かない内に、快
感に蕩けた表情を浮かべていた。

それに気付いたのは、智の苦笑交じりの言葉が聞こえたから。

「今は誘うな。ほら、新しい着替えた。」

そっちが仕掛けてきたクセにと、潤んだ瞳で智を睨みながら、着替えを受け取り、身に着けた。

火照る身体に、新しい病衣はさらっとしていて心地よかった。

人心地つき、気を緩めていた私は、智の手が下半身に伸びている事に気付かなかった。

気付いた時には、どうやったのか、ズボンが脱がされ、温かいタオルで拭かれていた。

「や、恥ずかしい・・・っ。ヤメテ・・・っ」

脚を拭かれる事が、こんなに恥ずかしい事とは思わなかったし、知らなかった。

（今なら、恥ずかしさで死ねる。）

今、私の脚を持ち上げ、拭いている手は、普段は多くの従業員とその家族の生活を支え、守る為に、パソコンや万年筆、何ヶ国もの色々な新聞のページを括っているモノ。

ふいに、その手が止まり、僅かに震えた。

「吉乃、手術で治るとしたら、お前は受けてくれるか・・・？」

不安に彩られた智の声音に、私は何も言えなかった。

「どうして、お前だったんだろうな、吉乃・・・。」

その小さな呟きを聞いて、私は決意した筈だった。

二度と貴方を悲しませたり、傷つけたり、一人にしないと。
なのに、それを私は破ってしまった。

ごめんね、智。

♪、10 姑・さくらの策略（後書き）

ギリ、18 禁じゃ、ないですよね？

ああ、むず痒かった。

こんなシーンは、二度とごめんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895x/>

Si je tombe dans l'amour avec vous

2011年11月7日15時09分発行